松本市農業の課題解決プラットフォーム「活かす農まつもと」

「農業と観光に関する検討部会」第１回会議結果

令和６年５月２２日　18 時 00 分
今井地区地域づくりセンター　２階会議室

１　出席者

１６名

２　懇談事項

⑴　松本市の農業人口、新規就農者の状況、課題の共有
⑵　今井地区の取り組み、新しい農業、魅力的な農業、稼げる農業の展望
⑶　農業と観光、パッケージプランの構想、アイデア
⑷　課題の整理
⑸　まとめ

３　会議結果

関係者間で今井地区（信州まつもと空港周辺）での農業体験を観光商品化し、「松本の農業」というコンテンツで国内外から松本に誘客する可能性について共有した。

また、次回の会議に向け各機関において以下の準備事項について確認した。

⑴　今井農業未来プロジェクト（以下、「農未来」とする。）

※　今井地区の農業者を中心に構成された団体

日帰り、テント泊、農泊（自身の農家住宅での宿泊）、近隣ホテル泊等、プランごとの整理が必要。具体的に何をどこまで農業者側で提供できるか、持ち帰ってアイデアを磨く。また、地区内で協力を求められる農業者のリストアップを進める。

⑵　松本市観光プロモーション課、松本観光コンベンション協会（以下、「観光部門」とする。）

農業体験を観光商品化するにあたって必要な諸手続、受け入れ体制づくり、料金体系など、他自治体や他分野の旅行商品を参考に整理する。

⑶　松本市農政課、今井地区地域づくりセンター、長野県農業農村支援センター

農業と観光に関する地域での取り組み（事業）について、国庫補助事業等で活用できるものがあるか検討。資金面でのサポートの可能性を模索。

４　今後の予定

７月～８月中を目途に、第２回目の日程調整を行う

５　発言要旨（発言者個人の特定を避けるため、要約しています。）

⑴　松本市の農業人口、新規就農者の状況、課題の共有

（農未来）農業人口という点では、ざっくり 60 歳以上の農業者が 80%、50 歳以下の 20%というのが現状であり、将来的に子や孫世代が中心となって農業を営む際、産地が健全な形で維持されているのか、大きな懸念がある。

（農政課）松本市の新規就農者（49 歳以下）の状況について、Ｒ３年度は６名、Ｒ４は 10 名、Ｒ５は８名。コロナ禍に新規就農の問い合わせや希望者が増加したが、最近は他の産業も盛んになっていることもあり下火傾向。松本市への相談件数は毎年 50 件前後だが、就農に結び付くのは 10 人に１人程度。

（農未来）今年の１月、東京で開催された就農フェアへ同行し、農政課職員と一緒にブースで相談を受け付けたが、「体験したい」という声は多かった。その場で提案できたのがデイワーク（短期アルバイト）等だが、副業禁止等で無理という方も多かった。無料、むしろ有料でも体験の機会が欲しいという就農希望者の需要が一番印象に残った。ニーズはある。

（農政課）旅行や食などを楽しむ「コト消費」から、その場でしか味わうことのできない体験「トキ消費」へとニーズは広がり、変化していることを踏まえつつ、体験型の農業企画の仕組みを検討したい。いかに多くの人に「松本の農業」に触れてもらい、興味をもってもらい、最終的に就農へつなげていけるのかが重要。

⑵　今井地区の取り組み、新しい農業、魅力的な農業、稼げる農業の展望

⑶　農業と観光、パッケージプランの構想、アイデア

（農未来）今井地区は水稲、多品目の野菜、果樹（りんご、ぶどう、梨、桃、さくらんぼ）、畜産（信州牛）など農業の松本市の農業のすべてが産地に濃縮されている。比較的若い世代も多く、新規就農者も多い。農業を楽しみながら新しいことにチャレンジしていく風土がある。

体験という点では、時期に応じてりんご摘花・摘果、ぶどう袋掛け、収穫、ジュースやワインへの加工現場の見学など生産に直結する体験の他、大型農業機械の操作、代掻き後の田んぼやきれいに耕した畑に子供たちに沢山足跡をつけてもらうなど、農業に関連した遊びも提供できる。

空港に近い今井で農業をしていて思うのは、空港からすぐに松本城、上高地の方へ人が流れていくこと。近年のアウトドア需要や体験型の旅行の需要に応える資源が今井にはあると考えている。

今井道の駅に、空港利用者（特に、外国人）はほとんど見かけない。道の駅を中心に空港を利用する観光客の誘致ができないか。

（観光部門）農業と観光を結び付け、修学旅行なども含め誘客に成功している事例がある（南信州観光公社）。その代表者に講座を依頼し話を聞く機会があったが、最初は一人ひとり農家を回って受け入れ体制づくりをしたという。

また、松本城、上高地など既存の強力なコンテンツがある松本で、南信州のような取り組みは非常に難しいという話もあったが、今回、農未来の話を聞いて可能性を感じた。まずは小さな規模で始めることが大切。個人レベルでの農家民泊（農泊）も盛んな地域はある。松本でもりんご農家でゲストハウスを営んでいるケースがあるが、多くの外国人（特にタイ人）が訪れるという。今井地区はどうか。

（農未来）自分の家に泊める、別宅があればよいが、同じ屋根の下はハードルが高い。特に妻や娘など女性側の意見が重要。事前準備もある。割り切ってあまり気を張

らず素の状態で受け入れると、意外と楽しめる（体験談）。

空港周辺の緑地を活用してテント泊、空き家を改修してコテージのように活用、市内の温泉旅館やホテルとの提携などアイデアもある。ただし、宿泊は最終段階。まずは日帰りでコンパクトにした方が良いと思う。

道の駅併設農地、体験圃場の果樹は大盛況、この状況をヒントに地域全体として企画できれば良いのではないか。

（観光部門）海外からのインバウンドに力を入れた道の駅での調査で、海外から来た方から「地域の人との会話」が一番楽しめたという結果が出ている。空港を利用し、観光客に農業体験を楽しんでもらう観点で、多くのヒントがあると思う。

集客は本当に難しい、まずは松本市民を対象に考えていくことも必要か。

（農未来）今井だけでも話が好きな農家がたくさんいる。そして、面白い。話の好きな農家のおじちゃんも、おばちゃんも、立派な観光資源になると思う。

空き家を農家民宿的に活用することも検討、手入れ・修繕は必要だが、手続き的なハードルはそこまで高くないことがわかった。

キャンプやバーベキューをして宿泊するには「風呂」が重要だと感じている。梓水苑は風呂を併設しているため、キャンプの客、家族連れの利用が容易。

すぐできることは、市内の宿泊施設に泊まって、今井で農業体験することか。

その他のキーワード

・リモートワークと農業
・農業を副業から本業へという流れ
・社員教育プランとしての農業体験

⑷　課題の整理

（観光部門）課題を整理すると、「いつ、何のプランで、何人まで」受け入れが可能で、それを「何日前まで」募集するのか。プラン案は多くあるが、どれを選択して実施していくか検討、整理していく必要がある。

（農未来）自然相手なので農業者側も「この日」と指定されても個人レベルでは調整できない。地域レベルでの調整、複数（なるべく多く）の受け入れ農家が必要。

また、重要なのはガイドの育成と考えている。今井という産地を案内でき、観光客と農家をつなぐ役割を担える人、ここが鍵だと思う。

この点の仕組みづくりについては、また観光部門のお知恵を借りたい。